HCニューズレター

No.19

Human Care News Letter

2018年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

ヘルスケアシステムにおけるヒューマン・ケアデザインの探求

日本ヒューマン・ケア心理学会第十九回大会を開催して

山梨大学大学院総合研究部　中込さと子

日本ヒューマン・ケア心理学会第十九回大会は、「ヘルスケアシステムにおけるヒューマン・ケアデザインの探求」をテーマとし、平成二十九年九月三十日、十月一日に山梨県で開催いたしました。

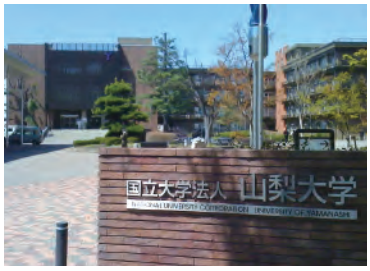
●改めて設立趣意に立ち返る

当学会の設立趣意は**「看護、介護、世話などのヒューマン・ケアにかかわる諸現象を心理学的取り組みによって解明し、人間の健康及び福祉の向上を支援すること」**です（公式ホームページより）。振り返ると当学会が設立されたのは私が大学院生時代（現、聖路加国際大学）であり、「これから心理学・看護学の諸先輩方によってヒューマン・ケア研究が推進されるのだ」、と大きな期待を寄せて入会いたしました。

設立後から今日まで、世界は思いもよらない方向に変化しています。国内外の紛争やテロにより政治経済の情勢はますます不透明になり、IT産業の拡大は人の生活・思考・関係性に大きな影響を及ぼしています。とりわけ私が携わる遺伝／ゲノム医療は社会に多大なる影響を与えたと思います。社会に対して「子どもを産み育てることの意味」「将来発症するかもしれない病気と向き合うことの意味」、「治療法がない病と共に生き抜くことの意味」を問いかけているのです。



大会委員長　中込さと子先生



山梨大学

振り返って第十六、十七回大会ではスピリチュアル・ケア、第十八回大会では専門職者のキャリア開発が取り上げられました。そこで第十九回大会では、研究者と臨床家、心理学と看護学と教育学等、様々な立場の会員が成果を出し合い、ヒューマン・ケアデザインの探求を深めていこうと思いました。

●プログラムについて

まずは県内を中心に当学会のことを知っていただくために、地元の医療現場や教育現場にいる方々に役立つ研修会テーマを選びました。「動機づけ面接法」は、クライエントが自ら自分の行動や価値観を変えていこうとするのを支える技術であり、すぐにも役立てられ、身近な人々を相手に訓練することができます。参加者四十九名の大半は看護師であり、臨床家として心理学的手法を学び意義を感じることができたと思います。

学術集会では、口演発表者の中村恵子氏（東北福祉大学）、富田悠斗氏（東北大学大学院）、阪無勇士氏（東京成徳大学大学院）、松川春樹氏（東北大学学生相談・特別支援センター）が盛り上げてくださいました。認知行動療法やポジティブ心理学の日記介入の効果を分析したり、M-GTA法やKJ法を用いて困難な課題を取り上げる等、大いに参加者の関心を高めてくださいました。その後のポスターセッションも和気あいあいと盛り上がり、有意義な時間になりました。

午後の基調講演では、長く遺伝性神経難病をもつ人々への心理臨床に取り組んでこられた後藤清恵氏が「医療におけるヒューマン・ケア」と題してヒューマン・ケアの探求のプロセスを語られました。〈1. 生活モデルを考える〉〈2. ケアの視点：個人と個人が織りなす「関係」〉〈3. 相互的行為としてのケア〉〈4. 人の価値観について〉の流れで講演されました。ケアは、人の価値観や希望を理解し、現実との差に向き合い、援助を組み立てていくことによって道が開かれると、ご提示くださいました。

この基調講演を受けて、最後のシンポジウムでは、医療・教育現場

のヒューマン・ケアを発表いただきました。最初に、胎児・新生児との死別という人生最大というべき困難を経験している人々に関わる宮田郁氏（リエゾン精神看護専門看護師）、次に、動機づけ面接法を使って妊婦の禁煙維持に寄り添う神山とき江氏（助産師）、最後に就職活動で精神的健康を損なう若者を応援している原瑞穂氏（山梨大学キャリアセンター）です。詳しくはニューズレター内の報告者に譲りますが、討議の中で「ヒューマン・ケアの深さ」を語り合う貴重な時間になりました。

●ヒューマン・ケア研究の架け橋

学術集会を終えて、ケアの諸現象を目前にしながら実践活動をしている臨床家と、心理学的に解明しようとする研究者が、もっと近づき交流していくことが必要だと感じました。ここに当学会の未来があると考えます。

最後に、記念すべき第二十回大会は日本健康心理学会との合同開催になります。次回の学術集会がさらに発展していくことを期待しつつ皆様との再会を心待ちにしています。







懇親会の風景

基調講演

「医療におけるヒューマン・ケア」

独立行政法人国立病院機構新潟病院　臨床研究部　後藤　清恵先生

基調講演は、独立行政法人国立病院機構新潟病院の後藤清恵先生をお招きし、ご講演をいただきました。ご講演の内容は、（1）心理的ヒューマン・ケアとは、（2）QOL：医療の中での取り組み、（3）SEIQOL法からQOLを理解する、（4）ケアのコミュニケーション、（5）動機の語彙からの検討、（6）集団ケアの6つより構成されました。

後藤先生は、ご講演の中で、病を持ちつつも社会的役割を果たす存在として患者さんを理解することの重要性をお話しされました。先生のお話の中で、特に印象深かったことは、医療者がもつ「健康であらねばならない」という健康志向の価値観を解放することによって、病気を持ちながらも社会的生活を送る患者さんの主観的立場に視点に立ち、QOLを維持することが出来るという、先生のヒューマン・ケアとコミュニケーションの視点でした。また、様々な、指定難病を持つ方や家族との関わりの事例から、患者さんやご家族自身の健康志向性に介入し、自分で人生を選びなおし、新しい状況に適応していく過程を支えるというケアのあり方に大変感銘を受けました。後藤先生は、進行性で根治療法がなく、長期の療養が予想される疾患であっても、QOLは下がるという仮説は訂正され、人はその新しい状況に適応する存在であると結論付けておられます。このご講演で、疾患を中心とした「治療」という対応を中心におくのではなく、残された機能を積極的に生かし、生活の質を高めていく、その人自身と関わることの大切さについて改めて考える機会を頂きました。



基調講演　後藤清恵先生

次に、ケアのコミュニケーションについては、問題の受け入れがたさ（違和感）とどのように付き合うか、その人自身がかかえる問題を中心に客観的に話をすすめ、問題への取り組みを一緒に考える過程についてお話しいただきました。また、集団によるケアの事例として、ALSの集団による心理的援助（サポートグループ）への取り組みについてご紹介いただきました。様々な喪失の危機に直面しながらも、グループのメンバーで問題を分かち合い、互いへのフィードバックがなされ、他者への思いやりと自分への肯定感が生じ得る過程のご説明があり、可能な限りの手段でコミュニケーションをとりつつ、お互いを支えあうことに患者さんが喜びをもって参加されている様子がうかがえました。

限られたご講演時間の中で、ヒューマン・ケアの理解にはじまり、ケアの実際までお話しいただき、先生のケアの視点が盛り込まれた、とても充実した六十分でした。

（山梨大学大学院　総合研究部　浅野浩子）

学会論文賞

「第三回論文賞を受賞して」

東北大学　予防精神医学寄附講座　東海林　渉

この度は、大変光栄な賞を賜りまして、誠にありがとうございます。賞をいただいた研究、「糖尿病者と配偶者の食事療法における取り組みに及ぼす性別の影響と問題構造の検討 ―混合研究法を用いて―」（十七巻二号）は、夫婦の食事への取り組みが性別によってどのように異なるか検証し、また食事に関する夫婦の問題構造がどのようになっているかを探ることを目的とした研究でした。

研究では糖尿病者百三十一名と配偶者百二十二名の方にオンラインによる調査を実施し、夫婦それぞれの食事療法への取り組みについて質的データを収集しました。性別の影響に関する仮説検証では、KJ法による質的分析の後に、二値変数に変換して量的分析を行う混合研究法の変換型混合デザインという手法を採用しました。混合研究法は初めてでしたので調査から執筆までにかなり時間がかかってしまいましたが、質的研究と量的研究をつなぎ合わせるハイブリッドな手法は刺激的で、大変勉強になりました。

主な結果の一つは、夫婦の食事療法への取り組みに性別の影響が明確にみられたことでした。女性配偶者の方が男性配偶者よりも食事の直接的なサポートを提供しやすく、一方で、男性配偶者は女性とは違った形でサポートしている可能性が示唆されました。そして、過干渉の問題は男性糖尿病者ー女性配偶者において、関心の低さの問題は女性糖尿病者ー男性配偶者において生じやすいことを指摘しました。家庭内で女性が食事作りを担うことが多い社会背景を考えれば当然のことかもしれませんが、それを実証的に示すことができたことが成果だと思います。

また二つめに、夫婦相互の回答を基にして、夫婦の問題の発生と維持に関する「家庭内の食事提供における三要素バランスモデル」を提唱しました。バランスモデルは、「食の好み」、「健康志向」、「食事作りの手間」という三要素が夫婦間の葛藤（ストレス）を生み出す要因になっていて、どれか二つを重視すると残りの一つが成立せず、三要素を共立させようとすることで大きなストレスが生じるというモデルです。バランスモデルでは、「食の好み」と「健康志向」の不一致を解消するための対処モデルをいくつか想定していて、夫婦の食事療法への取り組みを把握するための枠組みを提供することができました。

研究の裏話になりますが、バランスモデルの着想を得たのは二〇十二年の第十四回日本ヒューマン・ケア心理学会での発表準備をしている最中でした。研究成果をわかりやすく伝えるために、夫婦の回答から当事者と医療者が共有しやすい視覚的なモデルを作ろうとしていた際に思いついた経緯があります。その後、論文化の際に、査読者の先生からのご指摘でモデルを洗練することができました。言うなれば、バランスモデルは本学会での発表を契機に生み出され、学会誌によって成長させられたと思います。この場を借りて、お力添えをいただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

今後は、論文賞をいただいたことを励みに、モデルの臨床適用や糖尿病を抱えた夫婦の支援方法の開発に向けて、更なる研究を重ねて参りたいと思います。



第3回学会論文賞
東海林 渉先生

学会論文賞

「第三回学会論文賞を審査して」

審査委員長 安保 英勇

第三回の学会論文賞はニューマン・ケア研究、第十五巻～十七巻に掲載された九編の原著論文を対象に審査が行われ、東海林渉先生が受賞されました。

受賞論文では、糖尿病者の食事療法に対し、定性・定量の両側面から接近し、複雑な現象の理解を試みております。また、患者のみならず、配偶者にも焦点をあてそのダイナミクスを描き、それらが性別によって異なる点をジェンダーの観点から考察し、患者・家族支援の新たな方向性を示唆するものでした。これらの緻密なアプローチと切り口の独創性、臨床への応用可能性が高く評価され、受賞の運びとなりました。

一方でモデル提示に留まっている考察もあり、今後の発展と続報を心より期待しております。

研修会報告

「動機づけ面接法」

講師 日本禁煙学会認定専門医、KUNIX代表
MINT（国際的動機づけ面接トレーナー）
寛容と連携の日本動機づけ面接学会常任理事
松尾 邦功先生

私は、松尾先生の講演により、「クライエント自身の宣言による自己動機づけ」を導くための面接技法を具体的に学ぶことができました。

動機づけ面接法（Motivational Interviewing：MI）とは、「変わりたいと思うが変わることがなかなかできない相談者（CI）の状態に対処するためのコミュニケーションスキル」のことです。例えば、「タバコは体に悪いのはわかっていますよ。でも、ストレス解消にはタバコが必要」といった悩みを抱えているCIが該当します。このように、CIの発言（トーク）中に「変化（チェンジ）したいが維持したい」といった両価性が見られること、言い換えれば変化に対して〝関心〟や〝準備〟が見られることがMIを使用できる前提になります。

そして、「MIは単なる誘導的スキルではなく、来談者中心的要素の共感を通して反発を避けながら、変化に関する発言を増やしCI自身の気づきによって行動変容へ導く手法である」と説明されていました。

この〝変化に関する発言を増やしCIの気づき〟を促進するのに寄与するのが、聴き手側（治療者、TH）による「聞き返しの延長にある要約（Summarizing）」です。そして、要約の際は、「維持トークとチェンジトークを同列で比較しているように見せつつ、チェンジトークへの聞き返しは意識に残りやすい後半に持ってくること」と、「矛盾する内容を並べる際は、接続詞として〝そして〟や〝一方〟を使用し、〝でも〟などの心理的防衛が働きやすい強めの逆説を使用することを避けること」などが大事になるとのことでした。これらを踏まえた上で、最初に挙げたCIの相談例に対して要約を行うと

TH：「ストレス解消にはタバコが必要、一方で体に悪いのは気になっている（んですね）」

となります。加えて、語尾を下げることもポイントになります。なぜなら、強制的な質問ではなく、「確認めいた感じ」になるため相手の返答を導きやすくなるから、とのことでした。

さらにMIの効果を増すための方法として、「複雑な聞き返し」についてもご教授がありました。複雑な聞き返しとは、「言われていないことを表面的に推測、または状況を明確に推察した大胆な言い換え」のことです。たとえば、

A：「次の休みにどんな事をしますか？」
B：「釣りに行きます」
A：「それは、友人と川にマス釣りに行くということ」

といったやりとりを指します。なかなか難しそうですが、「明確に相手のことを当てにいかなくてよく、たとえ間違っていても〝相手が正しい情報をくれる〟」という心構えでよいとのことでした。何より、複雑な聞き返しによって話し相手は「一所懸命に自分のことを考えてくれたと思う」という効果が生じる」とのことでした。これを踏まえて改めて要約を行うと、

TP:「ストレス解消にはタバコが必要、一方で肺気腫や心筋梗塞になるのは困る（んですね）」

となります。このような要約により、Cは「どのような問題が生じるから、変化したいのか」といった、気付きを得たり、明確な方向性を意識することが出来得るようになるのでしょう。しかし、いきなりチェンジトークを重点的に駆使するのではなく、「面接の前半は維持トークの一方でチェンジトークというサマライズで面接を方向付け」を行い、「中盤～後半にかけてチェンジトークを深く（価値や感情を想像しながら）聞く」といったように流れを意識していくことも重要になるとのことでした。

現在、私は大学院で面接技法を学び始めたばかりで、面接も手探り状態であります。そのため、今回の講演を拝聴できたことにより、一つの指針を得ることができたと感じております。学んだ技術を実践できるようになるためにも、講演中のエクササイズで行ったように、日常会話の中における複雑な聞き返しを積極的に行い、練習を積んでいくところから始めていきたいと思います。

（埼玉学園大学大学院　心理学研究科臨床心理学専攻
修士一年　大木葉友宣）



松尾邦功先生



シンポジウム

「ヒューマン・ケア実践のさらなる探求」

二〇一七年十月一日山梨大学甲府キャンパスにて、シンポジウム「ヒューマン・ケア実践のさらなる探求」が開催されました。現代人が抱える複雑な問題にヒューマン・ケアの専門家として取り組んでいる三名のシンポジストをお招きし講演をうかがいました。

宮田　郁先生（大阪医科大学附属病院　看護部　リエゾン精神看護専門看護師：以下リエゾンナース）は、精神看護の知識や技術を持ち、連携・連絡するという意味を持つ「リエゾン（liaison）」の名の通り、連携しながら、質の高い看護を実践する役割を担う専門看護師です。宮田先生からは、周産期医療の現場で実践し、構築した「出生前診断を中心とした支援システム」について、事例を通して講演頂きました。

次に、神山とき江先生（富士吉田市立病院　助産師）からは、前日開催した研修会の「動機づけ面接法」を用いた妊婦の禁煙維持支援について話題提供がありました。動機づけ面接法は、行動変容を支援する技法です。既に禁煙をしている妊婦に対して、その行動を維持する支援としても活用できる、動機づけ面接法の可能性について、事例の紹介から演述頂きました。

最後に、原　瑞穂先生（山梨大学キャリアセンター特任教授）からの話題提供です。原先生からは、リーマンショック以前の高い有効求人倍率を示す昨今、キャリア支援を通して見える二極化している大学生の気質と、個々の学生に対してのキャリア支援の実践について講話頂きました。

討議では、これらの実践活動の中での学びについて、さらに話題提供者である三名の先生方、基調講演の演者である後藤清恵先生も交え、それぞれの考えるヒューマン・ケアについて闊達な議論が展開しました。

最後に、本シンポジウムはヒューマン・ケアとは何かについて、参加者それぞれの実践を振り返り考える貴重な機会になったと考えます。そして、今後のヒューマン・ケア心理学会の方向性を示唆する実りある時間であったと思います。

（山梨大学大学院　小林康江）



シンポジストの先生方

優秀発表賞　口頭発表部門

「第十九回優秀発表賞を受賞して」

東北福祉大学　中村　恵子

この度は、優秀発表賞を賜り大変光栄に存じます。まずは長年にわたりご指導いただきました恩師の小玉正博先生と、臨床でお力添えをいただきました皆様、そして第十九回大会を運営されご審査くださいました先生方に心から感謝申し上げます。

今回発表させていただいたのは「抜毛癖をもつ大学生への認知行動療法」についての事例研究です。欧米では行動修正に焦点を当てた治療マニュアルが定着しているところ、認知再構成に焦点化した介入で成果を上げ、新しい介入可能性が示唆されたというものです。本事例は、かつて筑波大学心理・発達教育相談室のケースカンファレンスで発表させていただき、そのスーパーバイザーとして招聘されていらした小玉先生から「認知に訴えることで行動が修正できることの意味を考えるように」とのご助言をいただきました。

また、発表にあたりましては、大会運営を担われた先生方の多大な支援をいただきました。

まず、投稿時は「抜毛がやめられない大学生への認知行動療法」という論題でしたが、入稿後の審査を経て採択通知をいただいた折に、大会長の中込さと子先生から「抜毛癖がある、または抜毛癖をもつ大学生への認知行動療法」という論題の方が適切ではないかとご助言をいただきました。指摘されてみるとまさにその通りで、すぐに論題を変更いたしました。そして大会では、受付から一貫して温かい家族的な気配りで会場が満たされておりました。口頭発表は、いずれも気鋭の優秀な発表者が揃っておりましたところ、受賞の栄に浴し、本当に幸運に恵まれました。さらに、帰路では偶然ながら長田久雄先生のお供をさせていただき、特急の車中でシャンパンの祝杯を頂戴いたしました。

皆様のご厚意に心から感謝申し上げます。来年も再来年も、未来永劫ヒューマン・ケア心理学会の学術集会がご盛会でありますことを祈念いたします。

優秀発表賞　ポスター発表部門

「第十九回優秀発表賞を受賞して」

山梨大学　原　瑞穂

この度は日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第十九回大会において、優秀ポスター発表賞を授与していただき、大変光栄に存じております。調査にご協力していただきました学生の皆さん、ご審査をいただきました先生方に心より感謝申し上げます。

私の今回の研究テーマは、「キャリア形成科目の授業効果の検討Ⅰ資質・能力と自己効力感に着目してⅠ」でした。近年、大学では低学年からのキャリア教育が導入されていますが、授業効果の測定や評価法は曖昧であり明確な提案はなされていません。文部科学省が二〇一七年二月十四日に発表した次期学習指導要領改定案は、主体的・対話的で深い学びの実現による資質・能力の育成を目指すものであり、高等教育機関の教育にも同様のことが求められると考えられます。しかし、対話や議論を取り入れた授業は評価が難しく、テスト形式の評価法や学生の感想のみではその効果を正確に測定することは困難です。授業による変化を学生自身が客観的に把握し、それを教員が再評価できることが重要だと考えます。

本研究ではキャリア教育における授業によって学生の資質・能力や意識に変化が現れるのかを明らかにすることを目的として授業の効果を検証しました。調査は、全学共通科目のキャリア形成科目の1つである「人間形成論」の受講者二四八名を対象としました。この授業はオムニバス形式をとり、代理体験による自己効力感向上とＯＰＰＡ論によるメタ認知育成により学生の資質・能力を伸ばすことで、「生きる力」の育成を目指しています。

調査の結果、授業前後で基礎力と「自己効力感」、「進路選択に対する自己効力」の向上が見られ、授業の効果があることが示されました。これは、講師の経験を取り入れることで過去の経験が再構築され、未来への方策を見出す自信（自己効力感）が向上し、意識に変化が生じたものと考えられます。また、各項目の影響関係では、受講により学生の各基礎力（資質・能力）が向上し、自己効力感の向上を通して学修後の資質・能力を高め、進路選択に対する自己効力感を向上させていることが示されました。本授業は聴講が主な内容であり、この効果はあくまで学生の思考の中だけであることは否めませんが、学生自身が授業による資質・能力の向上を客観的に把握できたという点で意味があると考えます。この資質・能力と自己効力感の向上と、進路選択に対する自己効力に対する自己の手応えをその後の学生生活につなげられれば、真の学修効果が得られることになります。授業で向上した自己効力感を学生生活の中で実践するためには、継続した学びの機会や課外活動への積極的な関わりが必要でしょう。

キャリア形成科目には他にも科目があります。これらの授業効果も検討し、一つの授業で得られにくい能力を他の授業で補う工夫をすることで、キャリア形成科目全体で学生の資質・能力の育成を支援することが可能になるのではないかと思います。今後も、微力ではありますが、学生のキャリア形成のために効果的な授業を開発するとともに、授業内容を共有し補完し合うことで、より一層授業効果を高める研究を積み重ねていけるよう尽力したいと思います。

「学術大会第十九回大会に参加して」

国立精神・神経医療研究センター
認知行動療法センター　駒沢あさみ

大会に参加しての感想を書いている今、今大会が開催された山梨大学は豊かな自然に囲まれており、穏やかで静かな、素晴らしい環境の中で多くの学びを得、ヒューマン・ケアについて考える機会をいただけたこと、大変有り難く思いながら家路についたことを思い返しております。

一日目には動機づけ面接の研修が開催されました。私の中でずっときちんと学びたいと思いながら先延ばしになっていた動機づけ面接。講師の松尾先生より動機づけ面接の「明日から使えるスキル」を教えていただきました。様々な場面の対話の中ですぐに取り入れられるエッセンスを学び、自分の使えるスキルの幅が少し広がったように思います。

また、大会での口頭発表やポスター発表では多様な領域、視点での研究発表があり、刺激的でした。多くの学びの機会をいただいて自分自身も研究を進めていくモチベーションが高まりました。さらに、基調講演の後藤先生のお話、シンポジウムでの宮田先生、神山先生、原先生のお話と先生方の「ヒューマン・ケアとは何か」についてのお話はとても興味深く、大変勉強になりました。「ヒューマン・ケア」とは雲の隙間から時たま太陽が顔を出すようなもの、という小玉先生の言葉がとても心に残っております。ヒューマン・ケアに携わる中、無力感を感じたり、やるせなさ、悔しさで胸がいっぱいになることもありますが、よりよいヒューマン・ケアができるよう、希望を持って日々精進していかねば、と思いました。

毎回多くの学びの機会を与えてくれる本学会の学術大会。来年の大会に参加することが今からとても楽しみです。

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第20回大会のお知らせ
〈こころとからだの健康とケア〉

日本健康心理学会第31回大会と合同開催

開催日程…２０１８年６月23日（土）・24日（日）
開催会場…京都橋大学（〒６０７-８１７５　京都市山科区大宅山田町34）

大会テーマ…「こころとからだの健康とケア」

ポスター発表／口頭発表／学術委員会企画／教育講演／研修会
合同企画特別講演／合同企画シンポジウム
詳細はホームページに順次アップいたしますので、ご確認ください。
http://jahp.wdc-jp.com/conf/31st/inde

今後のスケジュール

大会参加への事前申込の期限	４月13日（金）
事前参加申込者の参加費払込期限	４月18日（水）
ラピッドコミュニケーションポスター発表への申込と原稿投稿の期限	４月中旬～５月29日（火）

プログラム集は、５月中旬に全会員へ郵送いたします。Ｗｅｂ上での公開は４月下旬を予定しております。今回の合同大会では発表論文集はＷｅｂ上での閲覧のみとして、冊子体またはＣＤでの論文集は作成しませんのでご注意ください。６月中旬の公開を予定しています。必要な方は、ダウンロードして印刷する等をお願いいたします。

日本健康心理学会／日本ヒューマン・ケア心理学会合同大会ヘルプデスク
（参加・発表申込・原稿投稿・諸費用に関するお問い合わせ先）
〒162-0801　東京都新宿区山吹町358-5　アカデミーセンター
ＦＡＸ　03-5227-8632
E-mail　jahp-jpahc-desk@bunken.co.jp

合同大会準備委員長（兼 日本健康心理学会第三十一回大会準備委員長）
日比野 英子（京都橋大学）
日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十回大会準備委員長
菅 佐和子（京都橋大学）

編集委員会より

機関誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。執筆要項などは昨年度変更され、一層投稿しやすくなったかと存じます。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のＷｅｂサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文のＰＤＦが学会Ｗｅｂサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のＩＤとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ＩＤ:HCkaiin2018　パスワード:D8ku2pAq
（Ｗｅｂ担当　羽鳥健司）

編集後記

学術集会の記事では、第十九回大会委員長の中込さと子先生をはじめ、執筆者の方々から大変素晴らしいご報告をいただきました。また今回は三年に一度の学会論文賞が決定された年でした。受賞された東海林 渉先生は、研究能力はもちろんのこと、とても爽やかな好青年であり、天は二物を与えるといった印象でした。

このページの上方には、京都橋大学の菅 佐和子先生のもとで開催される第二十回大会のお知らせがあります。今回は日本健康心理学会との合同開催です。また今年初めて開催される公認心理師試験の日程との兼ね合いで、開催日程が例年と異なります。最新の情報は逐次ホームページ上に掲載されますので、ご覧の上、奮ってご参加下さいますようご案内申し上げます。

（広報担当　羽鳥健司）

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
Tel & Fax: 03-3409-0914
E-mail: humancarepsy@redcross.ac.jp

●機関誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax:　022-795-6149
E-mail: jhcs@m.tohoku.ac.jp